

恋人はスナイパー
エピソード3への道
十字架編 ()

周が経営する賭博場・内(夜)
地下である。
むきだしのライト。
煙草の煙が充満している。
真ん中にリングが据え付けてある。
リング上で戦っている二人の男(大きくがっちりとしたプロレスラーのような)、
レフェリーもいる。
その周りに群がっている男たち。
札を握って中国語で叫んでいる。
自分が賭けた男に声援(殺気を含んだ)を送っている、
その中をやって来る、きなこと八雲。
リングをぐるりと囲んだ席(と言っても板を簡単に渡したただけのもの)に、八雲が空
いている所を見つけ、きなこをいざなって座る。

その上。
2階にVIP席がある。
コーが座り、隣に凱歌が座る。
その後ろには周と陳らが座る。
他の幹部たちも適当に座る。
下の者たちはボスの顔を知らない。
幹部たちが遊びに来たと思っている。
下で騒いでいる者たちを眺めながら、
コー「俺たちはこいつらを、満足させてやらなきゃならない。腹いっぱい食わせ、金でボ
ケットを満たしてやる。そうすれば、俺たちのために働いてくれる」
凱歌「・・・」
コー「勝ち抜け、凱歌。皆、強いボスについていく」
凱歌、立ち上がる。
VIP席を出て行く。
コーが周に合図する。
周が立ち上がる。

レフェリーが気がついて、試合を止める。
文句を言う観客たち。
レフェリーが上のVIP席を指差す。
周が立っている。
皆、静かになる。
きなこと八雲も見る。
八雲「1211のナンバー2、周だ」
きなこ「コー・村木もいる」
周「(中)皆、王凱歌が帰って来た」
人々は怒りで叫ぶ。
口汚く罵る者もいる。
陳がほくそ笑む。

周「(中)お前たちが審判を下せ」
ますます騒ぎたてる男たち。

八雲「王凱歌が・・・出て来る・・・？」
きなこ「え!？」

喧騒の中、凱歌が現れる。
男たちは拳を振り上げ、嫌悪感を露にする。
人々の間を縫って、凱歌がリングへ向かう。
手がでて、凱歌をつかむ。

手の主「(中)この裏切り者！」

凱歌「・・・(睨む)」
男、脅えて手を放す。
凱歌、反対側も睨む。
人々の間に恐怖が走り、騒ぎが納まる。
人々は凱歌のために道を空ける。

きなこ「ホイさん・・・」
と、心配そうに見つめる。

凱歌、ひらりと軽やかにリングに上がる。
そこには、先ほどまで試合をしていた2人の男がいる。
彼らと対峙する凱歌。
レフェリーが凱歌に尋ねる。

レフェリー「(中)先にどちらとやる？」

凱歌「(中)2人、一緒にいい」
レフェリーは驚き、2人の男のプライドは傷ついた。
観客に、

レフェリー「(中)2人对王凱歌だ。どちらに賭けるか決めろ！」
人々が一斉に札束をかざして、ヒステリックに叫び出す。
係の者が忙しそうに、人々の間をまわって金を集める。

きなこと八雲のところへも、係の男がやって来る。

係の男「(中)どっちに賭ける？」

八雲「(通訳して)どっちに賭けるかって」

きなこ「もちろん、王凱歌」

八雲「よし、乗った。(係の男に中国語で)王凱歌に頼む」
と、金を渡す。

リング上、2人の男が早々に構えた。
しかし、凱歌は構えない。
試合を投げているようなその態度に、人々は怒りをぶつける。
凱歌、実は集中力を高めている。
それは波1つたてない湖のような、静かなもの。

その力を感じている、コー。

そしてきなこ。

きなこ「なぜホイさん、戦うの？やっぱり組織に戻りたいの？『ボスを倒す』と言ったのは嘘だったの？」

レフェリーが、試合開始を合図する。

人々の声が一際大きくなる。
思わず身を乗りだすコー。

2人の男が争うように、凱歌に向かって突進して来る。
跳び箱のように避けた。
と思ったら、後ろから羽交い絞めにされた。
もう1人の男が、ボクシングのように打ってくる。
巧みにかわす。

お陰で、後ろの男が打たれてしまう。

後ろの男「(中) しっかり狙え！」

ボクシングの男「(中) お前こそ、しっかり押さえておけ」

男は渾身の力で、凱歌の顔面を狙った。

凱歌は後ろの男に体を預けると、両足を胸につけ、一気に前の男に蹴りを入れる。

男の顔に、凱歌の足がめりこむ。

男はそのまま仰向けに、ドーンと倒れてしまった。

間髪いれず、地面を蹴って、後ろの男の脳天に蹴りを入れる。

うわっと手を放し、頭を押さえる。

凱歌、男の首に足を引っ掛けて引き倒す。

そのまま首を締め上げた。

口から泡をふく男。

コー「本気・・・か」

コー、椅子に深々と腰をおろす。

自分が冷や汗をかいていることに気づき、驚く。

戦い終わった凱歌、男から離れる。

その冷たい炎のようなオーラに、恐怖さえ感じてしまうきなこ。

きなこの膝にどさどさと、札が落ちてくる。

先ほどの係の男が、金を落としている。

係の男「(中) おめでとう」

八雲「うわ！すげえ！」

八雲、金をかき集める。

きなこ「・・・(浮かぬ顔)」

2人の男が片付けられた後に、リングに上ったのは、あの沖浦島にいた刀を使う背の低い男である。

相変わらず、2振りの刀を握りしめている。

きなこ「(呆れて) まだいたんだ」

リングの中央でデモンストレーションのごとく、奇声を発しながら刀を振り回す。

そして型をびしっと決める。

男、決まった！とばかりににやりとする。

凱歌、進み出て、男の刀の一方を蹴り上げる。

刀が宙を舞う。

それをとろうと、うろうろする男。

凱歌が跳んで、その刀を奪う。

そして、男よりもずっと、華麗で優美なパフォーマンスをみせる。

会場が沸き立つ。

男、嫉妬心と焦りから凱歌に向かって行く。

刀が合うたびに火花が散る。
男は凱歌に、完全に遊ばれているという感じだ。

コー「(周に中国語で)何だ、あれは？」
周「?(わからない、といったジェスチャー)」

遂に凱歌によって、男は刀を飛ばされてしまう。
飛ばされた刀は、観客席へ。
きなこの頭上に刀が落ちてくる。
きなこ、手を伸ばし、見もせずにはしっと刀を取る。

凱歌、ちらりと見る。
男がへなへなとリングにへたりこむ。
凱歌、刀を捨て彼に背を向ける。
男の目が光る。
隠し持っていた小刀(彼の持っていた刀のミニチュア)を抜いて、背後から凱歌に襲いかかる。
凱歌、その手をつかむ。
男は自分の手で自分の首に、小刀をつきつけてしまうことになる。
脅える男。
凱歌、小刀を捨てる。
リングの上を滑っていく小刀。
端で止まるが、何者かの手がそれを拾う。
凱歌、男を殴る。
呆気なく失神してしまう。
その男のそばに、1人の男が降り立った。

凱歌「?(見る)」
范火清である。
不敵な笑いを浮かべている。
場内、范への声援が巻き起こる。
狂ったように金を賭ける人々。
圧倒的に、范への掛け金の方が多いようだ。
騒ぎにまったく動じることなく、凱歌と范は睨み合っている。
2人の間に流れる緊迫した空気。
范が上着を脱ぎ捨てる。
彼の胸元の十字架が揺れる。
沖浦島でも、激しい戦いの中で目についた物だ。
范、凱歌の表情を見逃さないように視線を外さないまま、十字架に口づける。
凱歌「(はっとして)まだ、持っていたのか・・・」
范「俺が背負った十字架だからな」
凱歌「!(胸が痛い)」

香港・郊外(回想・12年前の夜)
燃え盛る家。
それは范の両親が住んでいた家である。
駆けつける凱歌(25)
炎の前に、呆然と佇む范(20)がいた。
范、表情のない目を凱歌に向ける。

范「1211が親を探し出してくれた……。会ったよ……。何て言ったと思う？『ゴミ箱へ捨てたのに、何で今更？』だって……」

凱歌、范を刺激しないよう、静かに近づいて行く。

范、凱歌にすぎりつく。

范「どうして止めてくれなかったんだ！」

凱歌「……(切ない)」

人々の騒ぐ声が近づいて来る。

凱歌、范を促してその場から立ち去る。

同・街の中(回想・12年前の夜)

行き交う人々の中を歩いている凱歌と范。

幸せそうに微笑むカップルが多い。

街は明るく賑やかで、地獄の炎を見てきたことが嘘のようだ。

しかし、凱歌の表情は暗い。

それに比べて、范はどこか楽しげに、開いている店を覗きこんだりしている。

道端に、手作りのアクセサリを広げて売っている若者がいる。

范が興味を持って、その前に座りこむ。

若者は早速、商品を売りこむ。

若者「(中)俺がデザインして、作ったんだ。安くしとくよ」

范がその中から、十字架を1つ取り上げた。

若者「(中)それは俺の自信作だ。綺麗だろ」

范は何も言わずに、首につけた。

若者「(中)ああ、いいよ、お兄さん。すごく似合う」

范はそのまま、すたすたと歩きだしてしまう。

若者が慌てて後を追う。

若者「(中)おい!金、払ってくれよ」

范「(中)俺を誰だと思ってる」

息巻く范の肩に手を置いて、制する凱歌。

ポケットを探って、皺くちゃの札を数枚取り出す。

凱歌「(中)これで足りるか？」

若者「(中)ああ。でもこれじゃ、多いよ」

凱歌「(中)いいんだ。嫌な思いさせて、悪かった」

若者、機嫌良く金を受け取ると戻って行く。

雨が落ちてくる。

若者「(中)よかったー。もう店じまいだ」

范は十字架を見せびらかすように、凱歌の前でぶらぶらさせた。

范「ほら、兄さん。今の俺に似合うだろ。安っぽい十字架が、さ。」

周が経営する賭博場・内(現在・夜)

12年前に買った十字架が、范の胸元で光っている。

あの頃よりもだいぶ傷んで、古くなっている。

それをじっと見ている凱歌。

凱歌「その十字架に、何を祈ってきたんだ」

范「……何も」

レフェリーが、試合開始を合図する。

范が構える。

気がついて凱歌も構える。

周りの男たちが騒ぎだてる。

おそらく范も、十字架を買った時のことを思い出したのであろう。
凱歌と范の間には、回顧的な雰囲気さえ漂う。
だが、それもすぐに破られることとなる。
范が、速い拳や蹴りを繰りだしてくる。
防ぐ一方の凱歌。
押されているように見える凱歌。
観客の声がますます大きくなる。
凱歌のスピードが范のそれを上回り、次第に攻撃へと転じていく。
范の腹に胸に、凱歌の拳がヒットする。
たまらず、後ろへ下がってしまう范。
顔を上げた時、凱歌の蹴りはもう目の前にあった。
まともに食らった范が、宙を回転して落ち、更にリング上をごろごろと転がって行く。
立ち上がろうとする范。
追って、頭を蹴ろうとした凱歌の足が、止まる。

范「やれよ。今更、遠慮すんな！」
と、立ち上がるや、拳を打ってくる。
それを紙一重のところで回転して避けた凱歌だが、その先から小刀が突きだしていた。
先ほど、小刀を拾ったのは范だった。
凱歌の目はそれを捉えていたが、服の左肩の後ろから背中にかけて切られてしまった。
切れたところから狼の刺青が、大衆の面前にさらされる。
しんと静まり返る会場。

きなこ「王凱歌を狼と形容したのは、このことだったんだ」
八雲「(呆然と)狼はボスの紋章だ。王凱歌はボスになる」
きなこ「そんな・・・馬鹿な！」
狼の刺青がきなこを威嚇していた。

その狼が再び牙をむく。
范が小刀で、襲いかかってくる。
それを握っている腕を、凱歌がへし折る。
その音がきなこのところまで聞こえ、顔をしかめる。
范が悲鳴を上げ、がっくりと膝をついた。
見下ろしている凱歌。
うなだれている范。
コーがすかさず叫んだ。

コー「殺(や)れ！遺恨はのこすな」
凱歌「(見る)！」
コー「預かった范の命を、お前に返そう」
陳「(中)殺せ！」

観客も口々に「殺せ」と叫び始める。
手負いの范。
范を見下ろしている、悲痛な表情の凱歌。
2人を見下ろして、決断を迫るコー。
観客の怒声が、次第に雨の音へとかわっていく。

香港・裏通り(回想・12年前の夜)
激しい雨の中。
十字架を買った直後のできごとである。

1 2 1 1の5人の刺客に追われて、逃げている凱歌(25)と范(20)。刺客たちの手には長い棒が、あるいは2本の短い棒が握られていた。

それを武器にして、凱歌と范に襲いかかってくる。

武器を持たない凱歌と范は、拳や蹴りで応戦する。

刺客たちは、凱歌と范を袋小路へと追い込んで行く。

3人の男が他の2人の男の背を踏み台に、ジャンプして襲いかかってくる。

范が腕を組んでさしだす。

そこを踏み台にして凱歌が跳び、3人の男に蹴りをいれる。

転がる男たち。

降り立った凱歌が、1人の男に気がつく。

レインハットを目深に被り、長いレインコートに身を包み壁にもたれかかっている。

その男に、ただならぬ気配を感じる凱歌。

刺客たちに囲まれる、凱歌と范。

范「(中) 何で1 2 1 1が、俺の命を狙うんだ」

刺客A「(中) お前は感情のままに」

刺客B「(中) 動きすぎる」

刺客C「(中) 親を殺すなんて」

刺客D「(中) 俺たちは肉親を大切にする」

凱歌「(中) 切り捨てるのは簡単だが、また1人、スナイパーを育てるのは大変なんじゃないか」

刺客E「(中) 掃除の時間だ！」

刺客たちが一斉に跳ぶ。

それは巨大な黒いカーテンが、覆い被さってくるようだった。

凱歌、范が動けなくなっているのに気がつくと、彼にとびつき一緒にコンクリートの上を転がる。

道路にたまった雨水が、水しぶきをあげる。

それを追って、刺客たちが跳んでは、次々と棒で殴りつけてくる。

が、空振りだ。

凱歌はしっかりと范を抱き、転がりながら逃げる。

范の十字架が、2人の間で揺れる。

まるで、2人で背負った十字架のようだ。

凱歌と范、止まる。

范の下になった凱歌が、刺客たちの攻撃から彼を守るため、素早く体を入れ替える。

凱歌に次々と攻撃が加えられる。

范「凱歌兄さん！」

范、凱歌をどけようとする。

凱歌「動くな！」

凱歌、血を吐く。

范「(悲痛) 兄さん、死んじゃうよ」

范の胸の上で、意識が遠のいていく凱歌。

男の声「(中) やめろ！」

刺客たちの攻撃がぴたりと止む。

男の声「(中) 殺すな」

刺客A「(中) はい、ボス」

ボスという言葉に反応して、凱歌がうっすらと目を開ける。

凱歌「ボス・・・？」

例のレインコートの男(コー・村木)が目に入る。

コー「(中) 王凱歌、范火清の命は預かるう」

刺客たち、凱歌を范の上からどかそうとする。
凱歌は意識が朦朧としながらも、刺客たちを蹴り飛ばす。
ゆらりと立ち上がる凱歌。
うつむき加減であるため、その表情が読み取れない。
それが一層不気味で、刺客たちは近づけない。
雨が、彼の体を打っては、滴り落ちる。
刺客たち、困ってコーを見る。
コーが、凱歌に向かって歩いて来る。
刺客たち、道を空ける。
コー、凱歌の胸に手をかざす。
凱歌が吹っ飛ばす。
刺客たち、范を乱暴に立たせる。

范「兄さん、助けて！兄さん！」

刺客B「(中) わめくな」

と、殴る。
范、気を失う。
刺客たちに引きずられて行ってしまう。
後に残ったコー。
倒れている凱歌。
空から絶え間なく落ちてくる雨。
乱暴に、凱歌の血を洗い流している。
コー、凱歌に近づく。

コー「(中) あいつらを殺すぐらいの非情さがないと・・・」

凱歌「范を殺したら・・・その時は非情になろう」

コー「(中) 俺を殺しに来るか」

凱歌、気を失う。

コー「生き残れ、凱歌」

コー、レインコートを脱いで凱歌にかけてやる。
去って行く。
雨がレインコートをたたいている。

周が経営する賭博場・内(現在・夜)

レインコートをたたいている雨の音が、人々の怒声へとかわる。
リング上、膝をついて痛みに耐えている范の傍らへ、凱歌が片膝をつく。
范が見る。

その目は痛みと憎しみで、真っ赤に充血していた。

范は折れていない方の手で、首のチェーンをぐいと引っ張り十字架を外した。
それを凱歌に差し出す。

震える十字架。

范「今日から、あんたが背負っていけ！」

凱歌受け取り、強く握りしめる。

気を失う范。

凱歌「(レフェリーに中国語で) 病院へ」

客席のきなこと八雲のところへは再び係の者が来て、金を鷲づかみにして渡す。

すると、後ろから手を伸ばして、金をかすめとろうとする男がいる。

係の男が素早くその手をつかむ。

係の男「(中) お前は兄弟の金を盗むのか」

男「(中)俺だって、王凱歌だと思った」

係の男「(中)お前は范火清だと言った」

2人、争い始める。

2人の手が、前に座っているきなこの帽子を落としてしまう。

帽子の中から現れた、きなこのさらさらの髪と線の細い白い顔。

係の男「(中)女だ！女がいる！」

その声に周りがざわつく。

八雲が慌てて帽子を拾い、きなこに被せる。

が、もう遅かった。

男たちが獲物を狙う獣のように目をぎらぎらさせて、周りを取り囲む。

きなこ、先ほど手に入れた刀を構える。

部屋の隅の方から金属音がした。

周の手下たちが、きなこに銃を向けたのだ。

近づいて来る手下たち。

八雲がはらはらして見ている。

凱歌の声「(中)待て！」

一同「！？(見る)」

凱歌がひらりと、リングから降りて来た。

凱歌「(中)手をだすな。俺の女だ」

きなこの周りを囲んでいた男たちが、道を空ける。

凱歌がきなこの手を取り、ぐいと自分の方へ引き寄せせる。

きなこ「ホ、ホイさん？」

上から見ているコーに向かって叫ぶ。

凱歌「もう、女は解禁でいいんだろ！」

コー「・・・」

凱歌、乱暴に、きなこの唇に自分の唇を重ねる。

きなこ「！？」

驚き慌てるきなこ。

凱歌の目はきなこを見ていない。

コーを睨んでいる。

コーもまた、凱歌を強く見据えている。

きなこは突然のことで、凱歌とコーの間に、駆け引きが生まれていることに気がつかない。

コーが周に向かって、小さく首を横にふる。

周「(中)銃を下ろせ」

手下たちが銃を下ろす。

凱歌の喉元に刀が突きつけられる。

凱歌「！」

凱歌、唇をはなす。

怒りのきなこ。

手下たちが、再び銃を構える。

凱歌、彼らを制するように手を挙げる。

そして、きなこを放す。

凱歌の喉元が傷つけられ、つーと血が流れる。

きなこ「！」

冷たくきなこを見ている凱歌。

何か言おうとするきなこ。

凱歌「八雲」

八雲「へい」

八雲が進み出る。

凱歌「彼女を送ってくれ」

八雲はきなこの腕をきつくつかむと、出口へと向かう。

コーが、きなこと八雲を目で追っている。

立ち上がり、

周「(中)さあ皆の判定を聞こう」

男たちから、王凱歌の勝利を祝福する声があがる。

彼は許され、再び仲間として迎え入れられた。

満足げなコー。

渋い顔の周と陳。

八雲に引っ張られて行くきなこが振り返ると、男たちの中心に凱歌がいた。

きなこのことなど、忘れてしまったかのように。

寂しく見つめるきなこ。

凱歌の姿が、人々によってかき消されていく。

タクシーの中(夜)

後部座席にいるきなこと八雲。

八雲「よかったよ、凱歌が機転をきかせてくれて」

街には、クリスマスのイルミネーションが溢れている。

その光が、悲しそうなきなこの顔を照らしている。

八雲、かける言葉が見つからない。

きなこ、凱歌の唇の感触をかき消すように、手の甲で唇を拭った。

傷ついている。

香港の街

街は活気に満ちている。

エネルギーに満ちた街である。

街を歩いているきなこ。

きなこ、アヴェマリアを口ずさんでいる。

ウィンドー・ショッピングをしている。

クリスマスのディスプレイに微笑む。

店の中へ入る。

バッグを手に取り、値段を見てそっと戻す。

同・ホテル・前

例の、ボス主催の晩餐会が行われたホテル。

きなこの口ずさむアヴェマリアが、流れている。

ホテルから出て来る、1211の集団。

ダークな色のチャイナ服の上に、真紅のロングコートを羽織りサングラスをかけたコーが先頭。

1歩下がった左右に周と陳がいる(スーツに黒のロングコート、サングラス)。

その後ろに続く男たちは、黒のスーツにサングラスをかけている。

周の肩に、後ろから手が置かれる。

振り返ると、凱歌である。

スーツに黒のカシミアのロングコート、サングラスをかけている。

集団の足が止まる。
凱歌は周と陳に、道を空けるように手ぶりで示す。
周と陳、コーを見る。
コーは何も言わない。
仕方なく、道を譲る周と陳。
凱歌、コーの隣へ立つ。
コー、それを横目で見ると、口元が動いて苦笑する。
コーと凱歌を先頭に、再び集団が動き出す。
周と陳の不満が、サングラスを通してよくわかる。
集団の前に立ちはだかるきなこ。
迫って来る集団。
動かないきなこ。
コー、気がついてちらりと凱歌を見る。
動じない凱歌。
きなこの目の前に迫る集団。
コーと凱歌、左右に分かれてきなこを避ける。
後ろの集団も凱歌とコーに従って、綺麗に左右に分かれてきなこを避けて行く。
避けた後、再び1つの集団となる。
凱歌の耳に、きなこの口ずさむアヴェマリアが届いているはず。
行ってしまう凱歌。
きなこ、アヴェマリアを口ずさむのを止める。
きなこ、振り返る。
歩いて行く凱歌の後ろ姿。
きなこの声「あなたがわからなくなった。日本に帰る。もう、二度と会わない」
凱歌が足を止める。
振り返る。
男たちが川のように、2人の間を流れていく。
心が動いたのか、凱歌がサングラスを外そうとする。
見ているきなこ。
だが、凱歌、手を止める。
もう一度きっちりとサングラスをかけ、きなこを見る。
本心をサングラスの中に閉じ込めてしまった。
コーが足を止める。
男たちも足を止める。
集団の中に取り残されている、凱歌ときなこ。

コー「凱歌」

コーが振り返りもせずに、凱歌を呼ぶ。
凱歌、きなこから視線を外し、コーの方へ歩いて行ってしまう。
凱歌が来ると、コーも歩きだし、集団が動き出す。
集団の川の中に取り残されたきなこ。
男たちの体が、どん、どん、ときなこにぶつかる。
よるめくきなこを残して、男たちは行ってしまう。
凱歌を見送るきなこ。
きなこ、男たちとは反対の方向へ歩き出す。
コーと凱歌を先頭に歩いている集団。
コーが凱歌の側ではない方の手で、彼にわからないよう合図を送る。
一番後ろの数人が集団を離れる。

同・道

忙しそうに行き交う人々。

きなこがその中をぼんやりと歩いている。

明らかに人々の邪魔になっている。

後ろから1211の男たちが、きなこを追って来る。

気がつかないきなこ。

あっという間にきなこを取り囲む1211。

きなこ「!?・・・1211ね」

きなこ、男たちに囲まれたまま、建物の間の細い道へと連れて行かれてしまう。

人の目が届かないことを確かめると、きなこの両側の男たちが、きなこの腕をつかむ。

きなこ「あんたたちは、すぐに乙女と手をつなぎたがるのね」

そのまま、きなこ、腕を振り払うようにして男たちを投げ飛ばす。

きなこ「この、ちかん！」

後ろの男が羽交い締めにしようとするが、きなこは腕を上げ体をすぼめて逃げ、足を回転させて彼の足を払う。

前から襲いかかる男の下腹に、思いっきり蹴りを食らわせる。

男たち、体勢を立て直そうとするが、きなこはそのすきを与えずに攻めてくる。

たちまちのうちに倒されてしまう男たち。

きなこ「ふん、馬鹿ね。私、今、失恋したところなのよ」

陳が経営している中華料理店・前

けばけばとした派手な装飾の店。

まさに陳を表している。

同・内

1人の男の目線で、入口の特大の置き物（コーから送られた招き猫）を通り過ぎ、大きなテーブルが並ぶホールを奥へと進む。

店内は開店前で、ゴージャスな照明もつけられておらず、客は誰もいない。

天井には、中国らしい豪快な絵が描かれている。

客席の中央に、グランドピアノが置かれている。

今は弾き手もなく、出番はない。

厨房から出て来た陳。

こちらを見てにっこりと微笑む。

微笑んだ相手は周（男は周であった）である。

数人の部下を引き連れている。

周は笑わない。

それでも陳は愛想よくふるまい、一番奥のテーブルへと周を案内する。

そこだけ照明があった。

既に、周派と陳派の1211の幹部たちが来ていた。

彼らが立って、周に挨拶をする。

テーブルの上には、高級中華料理が並べられている。

一同が席に着き、食事が始まる。

陳「(中) さあ、周の兄貴、何もなければどゆっくりしていってくれ」

周「(中) ありがとう。まさか、お前が私のために一席設けてくれるとは……。王凱歌に断られて、慌てて私に声をかけたんじゃないのか」

陳は周に酌をしていたが、その手が止まる。

陳「(中) そんなこと……」

やっとなんを見せ、

周「(中)冗談だよ。お前が私を裏切るわけがないものな」
陳「(中)当たり前だよ。俺は頭にきているんだ。あんな、俺たちが顎で使っていた殺し屋が、ボスの弟だとわかったとたんに、兄貴をないがしろにしやがって」
周「(中)いや。やはり、王凱歌は特別だった。あいつを使う時には、ボスの許可が必要だった」
陳「(中)ま、俺の方も、あっちの(一方を指差し)用心棒をやってもらって、こじれたヤツを片づけてもらったが……。だが次期ボスっていうのは納得できない。面子が丸つぶれだよな」
周「(中)ボスが決めたことだ」
陳「(中)本当に？兄貴、本当にいいのかい？引き下がるのか？」
陳の声が少し大き過ぎたらしい、同席していた者たちが周と陳に注目する。
周「(中)おいおい、何を言いたいんだ？」
陳「(中)ここには味方しかいないよ」
周「(中)……」
陳「(中)兄貴が起つっていうなら」
周「(中)しっ！(とさえぎり)滅多なことを言うもんじゃない」
陳「(中)場合によってはボスだって」
周、眉をひそめる。
周「(中)お前は過激すぎる」
陳「(中)だって、1211がここまで大きくなったのは、あんたと俺の力があってこそ、だ」
周の頬が、少し引きつったことに陳は気がつかない。
周「(中)お前の？ああ、まあな」
陳が調子よく、酒や料理を勧める。

同・前(夕方)

周と手下たちが、店から出て来る。
続いて陳が、手下を従えて出て来る。
黒の高級車が来て、止まる。
周の手下の1人が、後部座席のドアを開ける。
乗りこむ周。
車がクラクションを鳴らして発進する。
丁重に見送る陳。

車の中(夕方)

後部座席の周が、隣に座っている側近にささやく。
周「(中)あいつ、自分が組織を大きくしたようなことを言って……。油断できないな。こっちが王凱歌を殺(や)っている間に、後ろから銃をぶっ放してくるだろう」

陳が経営している中華料理店・前(夕方)

周を見送った陳が、手下と共に店内に入ろうとしている。
陳「(中)いつまでも、下に甘んじていると思うなよ。なあ、これはチャンスだろ」
陳、機嫌よく手下の肩を叩く。

1211の訓練所

香港の郊外であろう。
公にできない施設であるため、中は薄暗い。
外部に音が漏れないようになっている。

少年たちが指導者のもとで、拳法の修行に励んでいる。

その一様に暗い目。

訪問している、凱歌とコー。

凱歌は、少年たちの暗い目が気にかかる。

凱歌「この子たちは？」

コー「拾ってきた者もいるし、親に頼まれておいている子もいるんだ」

凱歌「1211の兵隊に？」

コー「タダ飯を食わせる気はないよ」

コー、地下への階段を降りていく。

続く凱歌。

地下は射撃訓練所になっている。

少年たちがライフル等いろいろな銃を使って、訓練を受けている。

標的を狙う少年たちも、やはり暗い目をしている。

コー「第二、第三の王凱歌が生まれるだろう」

と得意そうに言う。

少年たちを見つめる凱歌の目が、彼らに負けないほど暗い。

中国高雲省射撃養成所（回想・27年前）

射撃場で、ライフルの射撃訓練を受けている凱歌（10）

教官の檄が飛ぶ。

もたもたしている凱歌を殴る教官。

床に倒れる凱歌。

床に落ちるライフル。

暗い目をしてうつむく凱歌。

1211の訓練所（現在）

十歳の時の暗い目が、現在の凱歌の目と重なる。

ほとんど同じ暗さだ。

男が1人やって来て、コーに近づく。

コー、ギロリと睨んで手の平でしっしつとやる（近づくな、ということ）。

慌てて少し離れ、

男「（中）周と陳が、陳の料理店で会っていたそうです」

コー「ふん、俺へのメッセージのつもりか。」

男が立ち去る。

コー「凱歌、少し刺激しすぎたな」

凱歌「？」

コー「周と陳が、無茶をしそうだ」

凱歌「あの2人、僕を認めない。誰がボスなのか、きっちり教えないと」

コー「ボスは俺だ」

凱歌「もちろん」

凱歌、近くにいた少年から銃を取ると、的を撃つ。

連射する。

手元のスイッチを押すと、的がこちらに向かってきて止まる。

弾痕が綺麗に一直線に並んでいる。

コー「・・・」

コーの方を向いて、

凱歌「あんたは、そんなに和やかにやってきたのか」

その言葉の中に、静かな怒りを感じる。

コー、凱歌に近づくと鎮めるように、肩に手をのせる。
コー「ちょっと、旅にでしょうか」
凱歌「？(とまどう)」
コー「俺たちの故郷(ふるさと)へ」
凱歌「故郷・・・？」
コー「一番気がかりだった仕事も片づいた。お前に、生まれた村を見せたい」
凱歌「・・・」
コー「もう雪がくる頃だな」

八雲の祖母の家・居間
きなこが荷物をまとめている。
祖母がお茶を運んで来る。
祖母「寂しくなる」
きなこの手が止まる。
祖母「きなこ、娘、みたい」
きなこ「ありがとう」
祖母「きなこ、寂しい？」
きなこ「うん。凄く寂しい。おばあちゃんと別れるのも寂しいんだけど・・・」
× × ×
フラッシュバック。
サングラスをしたまま、無表情にきなこを見ている凱歌。
× × ×
きなこ「もういいんだ。とりあえず、日本に帰るね」
祖母がお茶を勧める。
祖母「娘、日本人、好き、なった」
きなこ「八雲さんのお父さんのこと？」
祖母「日本まで、追っかけてった」
きなこ「ああ、それで、私と娘さんが似てるって・・・」
祖母「八雲、生まれた。でも、男に捨てられた。病気で死んだ」
きなこ「そう・・・。意外と暗い過去・・・」
祖母「日本、嫌い」
きなこ「え、ごめんなさい」
祖母「(あわてて)きなこ、好き。娘、男のこと、嫌い、言わなかった。男と女、わからない。他人(ひと)にはわからない」
きなこ「私もわかんなくなっちゃった」
祖母「きなこ、何、わかってた？」
きなこ「私の知ってるホイさんは・・・お母さん思いで、優しくて、料理がうまくて、皆、ホイさんが好きだった・・・」
話しているきなこの顔が、とてもうれしそうだ。
祖母「きなこ、いい顔」
きなこ、顔を赤らめるが、すぐに暗い表情になる。
きなこ「でもね、すっかり変わっていたよ。とっても怖くて、冷たくて・・・(考え込む)
あれ？何か変だよ。ホイさんもしかして、わざと？・・・なぜ？」
きなこの携帯電話が鳴る。
きなこ「あ、お父さん」
雁太郎の声「よう、ホイさんには会えたかい？」
きなこ「(暗く)会えたけど・・・」
雁太郎の声「けど？」

きなこ「来なきゃよかった・・・かな」

円道寺家・茶の間

凱歌がチャン・ホイとしてホームステイしていた頃と、全然変わっていない茶の間。

茶箆笥やテレビの上には、土産物の人形が並べられている。

ちゃぶ台も部屋の真ん中に鎮座している。

下町の、居心地が良さそうな家である。

カメラがパンしてその様子を映している。

雁太郎がきなこの説明を聞いているのだろう、相づちを打っている声が響いている。

茶の間には、電話をかけている雁太郎しかいない。

雁太郎「それは、ホイさんじゃないよ」

きなこの声「・・・うん」

雁太郎「ホイさんはさ、こんな小さな店で、料理を作るのが楽しいって、言ってくれたんだ。闇の組織とかじゃあ、デカすぎて・・・」

きなこの声「そうだね」

雁太郎「俺は、あの時のホイさんを信じる」

きなこの声「父さん、ありがとう。いい時に電話してくれた」

雁太郎「親父だからな」

きなこの声「もう少し調べてみる」

雁太郎「よし、それでこそ俺の娘だ。刑事復活だな」

八雲の祖母の家・茶の間

きなこが携帯を切る。

八雲が帰って来る。

八雲「飛行機、取れたよ」

きなこ「ごめん。私、まだ帰れない。お願い、もう少し手伝って」

と八雲に手を合わせる。

八雲、改まったようにきなこの前に座る。

きなこ「？」

八雲「王凱歌はボスの・・・実の弟だったそう。次のボスになるんだ」

きなこ「(ショック)！・・・そう・・・なんだ」

八雲「それでもいいのか？もう、あんたのところには戻らないと思うよ。権力を手に入れたんだ」

きなこ「(強く)もう一度、信じたい」

祖母「(中国語で八雲に)力になっておやり、社長さん」

八雲「しょうがねえな」

と言いつつも、どこか嬉しそうだ。

香港警察・前

どこの国でも、師走(でなくても、か)の警察は忙しそうだ。

同・会議室

がらんとした部屋で、きなこが人を待っている。

ドアが開き、様々な資料を手に、張(39)が入って来る。

張「(英)お待たせしました」

張、資料をどさどさと机の上に置く。

張「(英)円道寺さん、お会いしたかった。張といたします。劉文忠は同僚でした」

きなこ「(英)劉さんのことは残念でした。それから、王凱歌の情報をありがとうございます

した」

2人、握手をする。

張「(英)いや、あれだけの情報から、王凱歌を見つけ出すなんて、あなたは優秀な刑事だ」
きなこ「・・・(苦笑)」

張が資料の山をかき回し、写真等で説明を始める。

まずコーと范の写真。

張「(英)1211のボスが、コー・村木。劉を殺したのが范というスナイパーだということもわかったし、感謝しています」

きなこ「(英)いえ、王凱歌からの情報なんです」

張「(英)ほう。じゃ(きなこの写真を取り出し)あなたが、王凱歌の愛人であることは確かなんです」

きなこ「えーっ!？」

張「(英)行動にはくれぐれも気をつけてください」

きなこ「はあ」

張「(英)冗談ですよ。日本から捜査に来ているんだと、説明してありますから」

きなこ「・・・(複雑)」

張「(英)こちらがナンバー2の周(写真)、こちらがナンバー3の陳(写真)です。この2つの勢力は、小さいいざこざを起こしながらも、均衡が保たれていました。次期ボスは周だと言われていましたが、陳にもその気は充分あった」

きなこ「(英)そこへ王凱歌が割りこんできた」

張「(英)彼は(凱歌の写真)あくまでも、スナイパーとしてのナンバー1です。孤高の殺し屋だ。組織の中に人脈もない」

きなこ「(英)そんな彼が弟というだけで、後継者に選ばれてしまった。面白くないでしょうね」

張「(英)ええ。間違いなくこの2人は、王を殺すでしょう」

きなこ「ホイさん・・・」

張「(英)殺した後、ボスの座の争奪戦が始まるとみて、香港警察(うち)も緊張しているんですよ」

きなこ「(英)仲間割れ？」

張「(英)いや、もう、戦争でしょう」

きなこ「(英)それだ!それですよ。王凱歌は自分を餌にして、内側から1211を潰そうとしているんだ」

張「(英)王凱歌が？」

きなこ「こうしちゃいられない」

きなこ、部屋をとびだそうとする。

張「(英)待って!コーは」

きなこ「?(見る)」

張「(英)常に慎重に狡猾に、1211を統率してきた。王凱歌を後継者にすれば、乱れが生じるとのことぐらい、わかっていたはずだ」

きなこ「(英)コーが、何か企んでいると？」

張「(英)そうです。だから、あなたはここまでにしておきなさい」

きなこ「だったら尚更、ホイさんを守らなきゃ」

きなこ、部屋を飛び出していく。

後に残った張が、ため息をつく。

張「(中)やれやれ、船木さんの言った通りの人だ」

ヘリポート(夜)

1211の経営するホテル(コーの住まい)の屋上にある。

ヘリコプターに乗りこむコー、続いて凱歌。

2人を追うように、1人の男（側近の1人、楊）が書類を持って来る。

楊（40）が書類をコーに見せる。

楊「何か他にお入用のものは？」

コー「女物の服を、多めに用意してくれ」

楊「かしこまりました」

コーが意味深に凱歌に笑いかけるが、凱歌には意味がわからない。

楊がヘリコプターから離れると、回転翼が回転し始める。

ヘリコプターが、夜空に舞い上がった。

香港の上空（夜）

凱歌とコーの乗ったヘリコプターが、ネオンの河の上を飛んでいる。

クリスマスが近いせいだろうか、光の数が多いようだ。

ヘリコプター・内（夜）

向かい合って座っている凱歌とコー。

凱歌は香港の夜景を、頬杖をついて見ている。

コーも夜景を見ている。

コー「貪欲な街だよな。自分を見ているようだ」

凱歌「・・・（見る）」

コー「（も見て）お前の寂しい目・・・俺が兄だと名乗っても明るくはならないんだな」

凱歌「・・・（目を伏せる）」

香港の上空（夜）

凱歌とコーが乗ったヘリコプターが、香港を離れていく。

1211の経営するホテル・内

コーが住まいにしているホテル。

きなこと八雲が、フロントに押しかけてきている。

フロント係の男はホテルマンとして丁寧に応対するが、どことなく横柄である。

八雲「（中）頼むよ。王凱歌の女が、彼に会いたいんだってさ」

フロント係「（中）王凱歌様？こちらには、いらっしやいませんね」

八雲「（中）じゃあ、どこへ行けば会える？」

フロント係「（中）さあ」

のりくらりとしたフロント係の態度に、八雲がキレる。

八雲「（中）いいかげんにしろよ！仲間じゃないか」

フロント係「（中）ふん、下っ端が」

八雲「（中）お前より上だ」

きなこ、はらはらして見ている。

もめているところへ陳が来る。

フロント係「（気がついて。中国語）陳様」

八雲「！（見る）」

陳「（中）こんな所でみっともないぞ」

フロント係「（中）この日本支部のヤツが」

陳、八雲を、続いてきなこを見る。

緊張するきなこと八雲。

陳「（フロント係に中国語で）楊を呼べ」

フロント係「（中）は、はい」

同・食料庫

楊に案内されて陳が入って来る。

高級食材が並ぶ倉庫に、驚きを隠せない陳。

楊、食材を書類で確かめていく。

ついていく陳。

陳「(中) すっげえな。これを全部、ボスの別荘へ運ぶのか」

楊「(中) まだまだ、これだけでは足りないですよ」

陳「(中) ふーん。俺の荷物も少しあるんだ。頼むよ」

楊「(中) はあ。しかし、あの2人を連れて行くなんて、いいんですか」

陳「(中) いいさ。恋人を連れて行ってやるんだ。王凱歌も喜ぶさ」

楊「(中) あなたを連れて行くだけでも、怒られそうなのに」

陳「(中) 俺はボスに、いろいろと相談があるのさ。今後のことについてな」

楊「(中) そうですか」

陳「(中) お前にだって・・・」

陳、楊の前へ回りこむ。

陳「(中) あるよ、相談」

楊「・・・」

港の近く(夜明け前)

きなこと八雲が、小さなバッグを手に立っている。

楊に指定された場所で、1211を待っている。

近づいて来る1台の4WD車。

車の窓が開いて、楊が顔をだす。

楊「お待たせしました。乗って下さい」

きなこと八雲が、車の後部座席に乗りこむ。

発進する。

その後が続くトラックの群れ。

その列が途切れることなく、港へと向かう。

ものすごい排気ガスが、トラックの隊列を包み込む。

港に停泊している貨物船。

その中と外では大勢の男たちが働いており、活気づいている。

貨物船の中へと吸いこまれていく、トラックの群れ。